

常州觀莊趙氏の歴史にみる 清代社会の一断面（6）

浅 沼 かおり

6. 趙烈文と『能静居日記』

第3節で述べたように、趙鳳詔（26世）の刑死後、その子孫である太原公分世の人々は辛酸をなめたが、趙仁基（太原公分世30世）は進士合格を果たし、湖北省按察使（正三品）という要職に任命された。趙烈文¹（道光12年－光緒19年。1832-1893年）は、趙仁基の息子であり、「常州觀莊趙氏支譜」（以下、「支譜」と略記）の編者でもある²。趙烈文は、咸豐8（1858）年から光緒15（1889）年まで欠かさずつけた『能静居日記』³（以下、『日記』と略記。以下、文中注の頁は『日記』の頁数である。また文中の月日は旧暦の月日である）をのこした。本稿にとって『日記』は、次の2つの点において重要な意味を持っている。第1に、『日記』には觀莊趙氏の成員が数多く登場するため、一族の様子、とくに太平天国後の状況を知ることができる。第2に、趙烈文が直隸省で知州（従五品）、直隸州知州（正五品）をつとめた時期の記述によって、当時の地方官の日常を細部にわたって具体的に理解することができるのである。

本節では、『日記』刊行までの経緯と、趙烈文の生涯の概要を紹介する。まず、『日記』について述べたい。趙烈文の年譜『陽湖趙惠甫（烈文）先生年譜』（以下、『年譜』と略記）の編者である陳乃乾氏⁴は、次のように述べている。

「（趙烈文が、引用者）平生著した詩，詞，草稿，金石の考証はすべて散逸してしまった。ただ手書きの日記の原稿64冊だけは家に所蔵されていた。そこには、乱世に逃げまどう苦しみ，当代の名士たちの離合のさまが記されており，切実で味わいがある。また清軍が江寧（南京，引用者）を回復し，李秀成（太平天国の指導者の1人，引用者）を審問するくだりは，公文書と照らし合わせると真実を知ることができ，歴史に裨益する。近年，先生の家族は上海で暮らしに困り，この原稿を米に易えようとしていた。著者はそれを知って，あるいは消失してしまうかもしれないと思ったので，10日ほどかけて読み，世間に伝え広めるに足る言行を摘録した。同時代人の著述も参照して，年譜1巻にまとめた。これによって，先生の徳業を伝えるとともに，二曾（曾國藩，曾國荃，

引用者)を敬慕する者たちの考証に役立てたい。』⁵

富田淳氏の説明は、もう少し詳しい。

「趙烈文には、道光三〇年(一八五〇)五月生まれの長子実(君堅)、および同治二年(一八六三)三月の生まれの次子寛(君闕)がいたが、趙烈文の収蔵品や日記・遺文の類は、次子の趙寛に承襲された。当時、虞山の地には宗舜年(子戴)⁶、丁祖蔭(初我)⁷そして趙寛(君闕)が蔵書家として知られ、陳乃乾と鄧邦述(正闇)の両人は三家と親交があった。宗舜年、丁祖蔭が他界した後、趙寛は父趙烈文の日記・遺文の刊行を頑なに意図していたものの果たせず、晩年に鄧邦述にその選訂を託した。ところが、鄧邦述は自らの蔵書を処分し、鬻字によって生計を立てる貧境に陥り、もはや選訂の余力はなかった。時に風雲急を告げる時局となり、寛は病床に伏し、娘の姞が一家を率いて疎開を続ける中で、趙烈文旧蔵の金石書画は、やむなく米に易える窮策を余儀なくされた。これに伴い、趙烈文が拓本の後に付した数百通に及ぶ金石跋の類も、その副本を録する暇のないままに、散逸してしまったという。やがて趙寛は上海で客死、程なく鄧邦述も病没し、僅かに残された趙烈文の日記稿本は陳乃乾の手に帰した。日々、紙値・印刷費が高騰する情勢にあって、陳乃乾は日記の刊行を断念し、やむなく編集したのが『陽湖趙惠甫先生年譜』一卷である。』⁸(引用中の注は原文の注を参考にしつつ、引用者が付したもので、原文と同一ではない。)

幸い『日記』は散逸することなく、2013年に岳麓書社から出版された。そのための労を執った唐浩明氏は次のように述懐している。

「20年あまり前、長編歴史小説『曾國藩』⁹を書いていたとき、『太平天国史料叢編簡輯』のなかで『能静居日記』という名の抄録本を読んだ。最初は私も単に一般的な史料として読んだのだが、はからずも読めば読むほど興味が湧いた。この日記は典雅で流暢な文章で書かれ、見聞したことを詳細、确实、精密に記している。ときに雰囲気を描写したり、話し言葉をそのまま記録したりして、読者は、その凄惨な時代に入り込んだような感覚を抱くのである。』¹⁰

上のように、『日記』に並々ならぬ関心を抱いた唐浩明氏であったが、刊行までには長い道のりを要した。唐浩明氏は『日記』の

「全本を見つけることが出来た。それは台湾学生書局の1964年の写真印刷本であり、全部で6大冊であった。しかし頁を開いてみると、すぐに大きな困難にぶつかった。趙の

日記は行草書で書かれており、書法は優れたものであるけれども、私には判読困難な文字がたくさんあった。(中略) まず草書を正確に判読できる人を捜すのは容易ではない。次にこの本を出版するには費用がかかりすぎる。(中略) のちに私は台湾で1人の学者と会った。彼は自分のほうから『能静居日記』の話を始めた。彼は、何年か前に著名な歴史小説家である高陽¹¹先生が、この本を整理して出版するつもりであったと語った。高陽先生は自分で整理者になるつもりで、自ら日記の一部を書き写していた。残念なことに、高陽先生はまもなく病気で亡くなられ、この仕事は頓挫してしまった。この学者は大陸の出版会がこの仕事をしてくれることを希望し、親切にも、高陽先生が自ら書き写された原稿の写真を私に送ってくれた。この原稿を手にして、私はますますことは差し迫っているとの感を強くした。ついに、(中略) 岳麓書社が引き受けてくれることになり、全国古籍整理出版企画指導グループの大きな支持を得て、湖南省社会科学院の廖承良研究員がこの本に句読点をつけて整理してくれることになった。』¹²

こうして2013年に『日記』はようやく活字となって世に出たのである¹³。

次に、趙烈文の一生をごく簡単に整理してみたい。表6-1は、趙烈文の生涯を年表にまとめたものである。

表6-1 趙烈文年表

元号	年	西暦	年齢	事項
道光	12	1832	1	安徽省懷寧県の官署で生まれる。父・趙仁基, 44歳。母・方蔭華, 31歳。
	14	1834	3	趙仁基, 山西省平陽府知府に昇進。
	15	1835	4	入塾する。
	16	1836	5	趙仁基, 江西省南贛兵備道に昇進。
	21	1841	10	趙仁基, 湖北按察使に任命されるが, 53歳で亡くなる。方氏は家族を連れて常州に戻る。
	22	1842	11	宜興に住む。
	24	1844	13	はじめて童試を受験。
	28	1848	17	鄧夫人(=南陽君)を娶る。
	29	1849	18	省試を受けるが失敗。六姉の夫・陳鍾英が挙人になる。
	30	1850	19	長男・克昌(のちに実と改名)が生まれる。
咸豐	1	1851	20	ふたたび省試を受けるが失敗。方氏とともに常州の旧宅に転居。長女・柔が生まれる。
	2	1852	21	みたび省試を受けるが失敗。科挙をあきらめる。
	3	1853	22	陳鍾英が浙江省富陽県の知県となる。
	4	1854	23	次女・荘が生まれる。
	5	1855	24	南昌で軍隊を指揮していた曾國藩が, 趙烈文を招聘する。
	6	1856	25	方氏が亡くなり, 常州に戻る。

	7	1857	26	服喪で家居。
	8	1858	27	日記（のちに能静居日記と名付ける）を書き始める。陳鍾英、湖州府安吉県に転任。
	9	1859	28	蘇州府呉県木瀆鎮に転居。
	10	1860	29	娘・蒼生、生まれる。太平天国の戦火を逃れ、太倉直隸州崇明県に居住。
	11	1861	30	安徽省池州府東流県に行き、曾国藩に会う。曾国藩により保挙。
同治	1	1862	31	安徽省安慶府で曾国藩の幕府に留まる。四姉の夫・周騰虎、亡くなる。娘・蒼生亡くなる。県丞に保叙。
	2	1863	32	次男・寛が生まれる。曾国荃により保挙。江蘇知県に任命。
	3	1864	33	浙江知県に改められる。官軍が南京を陥落させ、太平天国が滅亡。花翎直隸州に保叙。安慶から南京に転居。
	4	1865	34	常州で、祠産・塋産で開墾して一族を養うことを計画し、一族の殉難者のために専祠を建てることを願い出る。捻匪討伐に向かう曾国藩を送り、その弟子となる。常熟に土地を買い、家を構える。妾・董婉亡くなる。李鴻章の斡旋で蘇州忠義局に入る。
	6	1867	36	忠義局を辞め、両江総督に帰任した曾国藩のもとに行く。この年、毎日のように曾国藩と語り合う。
	7	1868	37	曾国藩、直隸総督に任命される。常熟にもどる。妾・李姫（阿娥）をいれる。
	8	1869	38	長男・実が六姉の娘・陳氏と結婚。曾国藩により直隸省保定府に呼ばれる。磁州に着任。
	9	1870	39	家族を磁州に迎えるが、李姫が旅の途中で亡くなる。天津教案おこる。曾国藩は両江総督に異動。
	10	1871	40	磁州を解任される。趙州の事件にあたる。保定府で通志局分纂になる。
	11	1872	41	易州に着任。曾国藩が亡くなる。長女・柔が方愷と結婚。
	13	1874	43	皇帝一行が西陵参拝のために易州を通過。鄧夫人ら常熟に戻る。
光緒	1	1875	44	次女・荘が方恒と結婚。易州を去る。常熟に戻る。四姉が亡くなる。
	2	1876	45	『常州觀莊趙氏支譜』が完成。
	3	1877	46	妾・馮氏（阿酥）をいれる。
	4	1878	47	長女の婿・方愷が保定の志局で亡くなる。長女・柔があと追い自殺をする。
	5	1879	48	馮姫が娘・穠（じょう）を生む。
	6	1880	49	兄・趙熙文が亡くなる。陳鍾英が亡くなる。
	7	1881	50	静圃に家を増築して、兄の遺族を迎える。
	8	1882	51	馮姫、2人目の娘を生む。次男・寛が鄧公武の次女と結婚。六姉が亡くなる。
	9	1883	52	妾・俞姫（黛娟）をいれる。
	10	1884	53	俞姫の妹（小鶯）を常熟の家に住ませる。
	12	1886	55	静圃が完成する。
	15	1889	58	俞姫の妹を妾（春院）とする。この年6月20日で日記が終わる。この後数年は多病であった。
	19	1893	62	亡くなる。

陳乃乾『陽湖趙惠甫（烈文）先生年譜』、沈雲龍主編、近代中国史料叢刊続編第九十九輯、文海出版社、中華民國72年をもとに作成。

趙烈文は常州觀莊趙氏の太原公分世31世として、道光12(1832)年に生まれた。父・趙仁基が安徽省安慶府懷寧県の知県をつとめていたときに官舎で誕生したのである。母は方氏(方蔭華)である。趙仁基には妻が3人、妾が1人いた。最初の妻・高氏は嘉慶20(1815)年に、2番目の妻・錢氏は道光2(1822)年に亡くなった。高氏が生んだ長男(鑄)も道光5(1825)年に夭逝している。高氏には娘が2人いた。婚約前に亡くなった娘については記録がないので詳細は不明だが、1人はおそらく若くして世を去り、もう1人の娘(烈文は二姉と呼んでいる)は李嶽生(子喬)に嫁いだ。錢氏には息子はおらず、2人いた娘の1人はおそらく早死にし、もう1人(烈文は四姉と呼んでいる)は周騰虎(弼甫)の妻となった。方氏は趙仁基にとっての次男・熙文、三男・烈文、四男・來燕、さらに娘を1人生んだ。四男・來燕は早世し、娘(烈文は六姉と呼んでいる)は趙鍾英(槐亭)の妻となった。妾・王氏には子女はなかった。趙仁基の子女とその配偶者をまとめたのが表6-2である。

表6-2 趙仁基の子女とその配偶者

父	母	子女	配偶者
趙仁基	高氏	一姉：亡	なし
		二姉	李嶽生
		長兄：鑄, 亡	なし
	錢氏	四姉	周騰虎
		五姉：亡	なし
	方氏	六姉	陳鍾英
		次兄：熙文	劉氏(咸豊7年卒), 馮氏
		烈文	鄧氏
		弟：來燕, 亡	なし

趙仁基は昇進を重ねたが、道光21(1841)年、湖北按察使に任命された直後に江西省で亡くなった。未亡人となった方氏は、家族を連れて常州に帰った。だが、おそらく一族の趙煥(殿撰公分世30世)の不始末で屋敷を失った一家は、道光22(1842)年、常州府城ではなく、常州府宜興県に居を定めた。家は宜興県城内の西察院にあったようである(1739頁)。貧しい暮らしのなか、道光28(1848)年、17歳の趙烈文は江寧の鄧氏を妻に迎えた。鄧氏(南陽君)は、第3節に登場した鄧廷楨の孫娘であり、父・鄧爾頤(子期)は山西省絳州直隸州知州をつとめている。趙烈文は道光24(1844)年にはじめて童試を受験している。試験に合格したかどうかは定かではない¹⁴。生員(秀才)にならないうちに、国学生(監生)の資格を購入して、郷試に臨んだのではないかと考えられるが、道光29(1849)年、咸豊元(1851)年、咸豊2(1852)年と3回郷試を受けたが合格せず、挙人になるのをあきらめている。

咸豊5(1855)年、24歳の趙烈文は、周騰虎(四姉の夫)に推薦されて、江西省で太平天

国と苦戦していた曾国藩の幕府に入った。だが翌年、母・方氏が亡くなり、家に帰って服喪した。咸豊10（1860）年には太平天国の戦火から逃げ延びて、家族とともに江蘇省太倉直隸州崇明県で仮住まいをしていたが、安徽省にいた曾国藩のもとに行き、保挙された。同治元（1862）年には県丞に保叙された。翌年には、曾国藩の依頼で南京の軍営にいる曾国荃のもとに行き、今度は曾国荃に保挙されて江蘇省の知県という身分になった。趙烈文の本籍は江蘇省であったので、翌同治3（1864）年には浙江省の知県に改められた。さらに、この年、太平天国の本拠である南京を陥落させた褒賞の一環として、花翎直隸州に保叙された。

同治4（1865）年、曾国藩は捻匪討伐の命を受けて北上した。曾国藩の門下に入った趙烈文は常熟に家を買ひ、蘇州忠義局の薄給で生計を維持した。同治6（1867）年、曾国藩が兩江総督として南京にもどったので、忠義局を辞め曾国藩のもとに行った。この頃が、趙烈文と曾国藩が最も親密な時期であった。同治7（1868）年8月、北京に召された曾国藩から、直隸総督に就任しても中央の官職についても呼び寄せると言われ（1199頁）、承諾した趙烈文はひとまず常熟にもどる。翌同治8（1869）年2月、曾国藩は直隸総督の任についた（1243頁）。趙烈文は約束通り、4月に常熟を発ち、直隸省の省都である保定府に向かった（1249頁）。

しばらく保定府で訴訟整理の仕事にあたっていた（1271頁）趙烈文は、10月28日に直隸省広平府の磁州¹⁵で知州代理に就任した（1295頁）。38歳のときである。翌同治9（1870）年4月には、常熟から磁州に妻子を迎えている（1328頁）。磁州で民のために奮闘した日々は、趙烈文の生涯で最も輝かしい時期であったといえることができる。同年、曾国藩は直隸総督を辞め、兩江総督として南京に戻った。趙烈文は曾国藩を見送り別れを惜しんだが、これが2人の永別となった。

同治10（1871）年5月20日、趙烈文は磁州の官印を後任に引き渡した（1411頁）。着任してわずか1年半あまりであった。直隸省では趙州直隸州知州の席が空き、後任は趙烈文だとの下馬評が高かったが、結局そうはならなかった（1421頁）。趙烈文は趙州でおきた水争いの大事件の合同審判にあたり（1442頁）、保定府で『畿輔通志』の編纂に加わったりして（1458頁）、日々を過ごした。

同治11（1872）年1月、趙烈文は直隸省の易州直隸州知州¹⁶の職を得た（1472頁）。易州は保定府に近いので、通志局の仕事も兼任することになった（1473頁）。易州での仕事は趙烈文にとって、磁州のように快いものではなかった。易州には皇室の西陵があり、陵の役人との関係が悪化したからである（1642頁）。同治13（1874）年4月頃から、家族を少しずつ常熟の家に帰らせていた（1603頁、1622頁、1646頁）趙烈文は、光緒元（1875）年8月、易州を後にした（1686頁）。44歳のときである。易州での生活は3年半ほどであった。引き留めようとしていた直隸総督・李鴻章には、来年また直隸に来ることを約束して、趙烈文は常熟の我が家に向かった（1700頁）。

趙烈文が帰宅したのは光緒元（1875）年10月のことである（1723頁）。光緒3（1877）

年、李鴻章がようやく退職願いを聞きいれた(1803頁)。趙烈文は頻繁に蘇州に出かけては友人や地方官と交際し、郷紳らしい余生を送った。隠遁後の趙烈文は静圃と名付けた庭園の造成に力を注ぎ、光緒12(1886)年9月に完成させた(2280頁)。趙烈文がこの世を去ったのは光緒19(1893)年、62歳であった。

最後に、「支譜」¹⁷ 編纂にかかわる『日記』の記述を追っておく。咸豊9(1859)年9月5日、28歳の趙烈文は編纂の決意を次のように述べている。

「今日から15日まで、先祖の遺文を調べることにする。わが宗族の豹三先生(趙彪詔・会理公分世26世、引用者)は『世由録』(『趙氏世徳録』の誤りか、引用者)数百巻を編輯した。それはずっと族祖・味辛先生(趙懷玉・殿撰公分世29世、引用者)の家に収蔵されていた。先生が亡くなると、叔父¹⁸・子広(趙熒・殿撰公分世30世。趙懷玉の子。引用者)はそれを守ることができなかった。以前、廉訪(趙仁基、引用者)が虔州(贛州、引用者)で官職についていたとき、暇をみてはそれを書き写し、刊行しようとしていた。だが写し終えぬうちに府君(趙仁基、引用者)は亡くなり、原書は叔父の家に戻され、ばらばらになってしまったのである。私の家に残っていた半分(趙仁基が筆写したものと思われる、引用者)を、咸豊7年(1857年、引用者)に1度校正・編輯したことがあるが、いまそれを改めて採録・編集しようとしている。侶台公(趙鳳詔・太原公分世26世、引用者)以下、芝亭公(趙偉枚・太原公分世27世、「支譜」には芝庭と書かれている、引用者)から廉訪府君までの文集・志・状・伝・銘を増補して書となし、何巻かにする。他の血統[支]の文献はいまあるものに基づいて記録し、異聞を集めるのは他日を期すこととする」。(84頁)

趙烈文は、同治7(1868)年11月に「家譜世系図」を完成させ(1226頁)、「家譜新例」を立案し(1227頁)、「入城六房譜第五」を完成させている(1228頁)。翌同治8(1869)年2月6日には、直隸省に異動させ直隸州同知に補用するという命令を受け(1238頁)、同年4月19日に「家譜第一巻」を完成させた(1248頁)。趙烈文は4月24日には直隸省に向けて旅立っている(1249頁)。先述のように、趙烈文は同治7年8月に曾國藩と北方行きを約束していた(1199頁)から、出発前にできるだけ「支譜」の仕事を進めておきたいと考えたのであろう。

同治8(1869)年6月21日の『日記』に「族譜第三、写訂、終わる」(1262頁)との記述がある。磁州に赴任する以前、保定府にいたときである。同治13(1874)年4月15日には、「家譜が完成。陳氏嫁(長男・実の妻、引用者)に渡して南に持ち帰らせて、息子の実から族人たちに送り、確認してもらってから刊行するつもりである」(1602頁)と書かれている。易州を去る日も近いと考え、家族を常熟に帰し始めた頃である。光緒2(1876)年12月20日、45歳のときの『日記』には「集印『族譜』18巻がこの日に完成した。10年余りの願

が実現し、ほっとした」(1783頁)と安堵の思いが綴られている。官を辞し、常熟で隱遁生活をはじめて間もなくの頃である。「支譜」は、光緒3(1877)年1月から2月にかけて、兄・趙熙文をはじめ一族の者たちに配られた(1792頁)。

〈注〉

- 1 趙烈文に関連した論文には、富田淳「趙烈文と長垣本西嶽華山廟碑双鈎本」(『書学文化』第5号, 2003年), 本間一洋「趙烈文・天放楼旧蔵打裏整本中における牛欄造像記拓本の真偽と新旧について」(『書学文化』第15号, 2013年), 同「趙烈文・天放楼旧蔵打裏整本中における始平公像記拓本の真偽と剗底における変化」(『書学文化』第16号, 2014年)などがある。また、『能静居日記』中の太平天国時の逃避行について書かれた部分は「趙偉甫先生庚申避乱日記」と題されて、商務印書館(上海)の『小説月報』第8巻第1-6号(1917年)に連載されている。
- 2 「支譜」には、趙烈文自身について、次のように記されている。「国学生。人材を保挙するにあたり、廷寄により、本省の督撫が訪ねて探し、安徽大營に録用となった。その後また上奏保挙され、旨により軍機処に記名された。同治2年、特旨によって江蘇省の知県とされた。同知直隸州知州に保挙され、浙江に改められた。また奏調を経て、同治8年特旨により、同知直隸州補用として直隸省に送られ、磁州知州を代理し、易州直隸州知州を補授された。花翎を賜る(国学生、保挙人材、奉廷寄本省督撫訪求、咨送安徽大營録用、旋又奏保奉旨交軍機処記名、同治二年奉特旨、発往江蘇以知県用、歴保同知直隸州知州、奏改分發浙江、復経奏調、同治八年奉特旨、発往直隸以同知直隸州補用、署磁州知州、補授易州直隸州知州、賞戴花翎)」(巻七、太原公分世表第八、19-20頁)。
- 3 趙烈文撰『能静居日記』岳麓書社、2013年。
- 4 陳乃乾(1896-1971年)は浙江省杭州府海寧州の人である(陳玉堂編著『中国近現代人物名号大辞典』浙江古籍出版社、2005年、662頁)。
- 5 陳乃乾『陽湖趙惠甫(烈文)先生年譜』(沈雲龍主編、近代中国史料叢刊続編第九十九輯、文海出版社、中華民國72年)1頁。趙烈文については、朱尚文『清趙惠甫先生烈文年譜』(台湾商務院書館、中華民國69(1980)年)という年譜もあるというが、未入手である。
- 6 宗舜年(1865-1933年)、江蘇省江寧府上元県人である(前掲『中国近現代人物名号大辞典』847頁)。
- 7 丁祖蔭(1871-1930年)、江蘇省蘇州府常熟県人である(前掲『中国近現代人物名号大辞典』7頁)。
- 8 前掲「趙烈文と長垣本西嶽華山廟碑双鈎本」24頁。
- 9 唐浩明『曾國藩』湖南文芸出版社、1996年。
- 10 唐浩明「乱局清醒客」前掲『能静居日記』1頁。
- 11 本名は許晏駢(1922-1992年)、浙江省杭州人である。
- 12 前掲「乱局清醒客」4頁。
- 13 岳麓書店から出版されたのは2013年7月であるが、臺灣學生書局からも同年11月に出版されている。
- 14 唐浩明氏は趙烈文を「秀才出身」と書いている(前掲「乱局清醒客」1頁)が、『日記』には「道光24年、私は13歳であった。(中略)この年はじめて文章を書き[成篇]、童試を受けた。道光27年、家計が苦しくなり、師につけなくなったので、文字を宜興の潘曉村先生(中略)に送って、添削してもらった。道光28年以降、□(原文の字が欠落あるいは判読不可能だったと思われる、引用者)課した。道光29年、咸豊元年、咸豊2年と、3回郷試に赴いたが失敗した」(咸豊11年3月26日、300頁。引用中の年は原文では干支で記されている)と書かれているのみで

あり、生員として県学あるいは府学に入学したという記述はない。ただし、「暮れ方に江陰につく。武進界に近いところで停泊する。舟の中で、軍山を望む。14歳で試験に行くとき、兄、方君幼静らと登って眺めた」(咸豊11年7月2日, 337頁)という『日記』の記述から、江蘇学政の駐在地である江陰県に院試を受験しに行ったことは推測できる。『年譜』にも、生員になったという記述はない。程光澄等纂修、同治13年刊本『磁州統志』(卷之三、職官知州, 2頁)に「趙烈文、江蘇陽湖縣人、監生、同治8年任」と記されている。

- 15 磁州は雍正4年に河南省彰徳府から広平府に移された州であり、「衝、繁、難」とされていた(趙爾巽等撰『清史稿』卷五十四, 志二十九, 地理一, 中華書局, 2003年, 1905-1906頁)。
- 16 雍正11年に直隸州となった易州には、涿水県と、もとは山西省大同府に属していた広昌県が属していた。「繁、難」とされていた(前掲『清史稿』卷五十四, 志二十九, 地理一, 1920頁)。
- 17 第3節でふれたように、趙烈文の父・趙仁基の墓前の石碑の碑文を書いたのは曾國藩である。同治2年10月にも一度墓碑文を依頼している(700頁)が、同治6年9月16日に「梅廬公(=趙仁基, 引用者)の行状をもって、滌師(=曾國藩, 引用者)のところにかがって、墓前の石碑を書いてくださるようお願いする」(1113頁)と書かれ、翌同治7年10月13日に受け取ったという記述がある(1217頁)。
- 18 趙烈文は父と同世代で父より生まれのおそい(趙仁基は乾隆54年, 趙烈は乾隆57年の生まれ)趙烈を「叔父」と呼んでいるのであって、父母の弟、叔母の夫という日本語の意味での叔父ではない。

History of the Zhao Family in the Guanzhuang Village in Changzhou Prefecture (6)

Kaori Asanuma

6. Zhao-Liewen and his diary *Nengjinju-riji*

This section focuses on the life of Zhao-Liewen (1832-1893) who was the editor of *Changzhou Guanzhuang Zhao-shi zhipu* (the genealogy of Zhao family), the main material of this article. Zhao-Liewen, the son of Zhao-Renji, was a member of the Taiyuan-gong branch. After failing in the Provincial - examination, Zhao-Liewen became a staff member of the army headquarters for the battles against the Taiping Rebellion and enjoyed Zeng-guofan's favor, which raised him to the position of Department Magistrate of Cizhou and Yizhou successively in Metropolitan Area. After serving for several years, he resigned from the official service. Thereafter, Zhao-Liewen, being free from burdens of official work, lived a country life as gentry in the residence he purchased in Changshu County of Suzhou Prefecture. His diary *Nengjinju-riji*, which he wrote regularly from 1858 to 1889, vividly reveals us various aspects of the social life of the times.